

商品の「流通」(Zirkulation)と貨幣の「通流」(Umlauf) 'Circulation' of Commodities and 'Currency' of Money

奥山 忠信
OKUYAMA, Tadanobu

要 旨

日高普『経済原論』(日高 [1964]、[1983])は、貨幣の流通手段機能の説明の中で、商品の「流通」と貨幣の「通流」を区別することを提唱している。「通流」は耳慣れない用語であり、訳語としては本来は無理がある。

しかし、『資本論』第1部 資本の生産過程、第3章 貨幣または商品流通、第2節 流通手段では、「流通」という事象がZirkulationとUmlaufという2つの用語に分けて論じられている。商品流通はWarenzirkulation、貨幣流通はUmlauf des Geldes、あるいはGeltumlaufである。日常語としては、Zirkulationを貨幣の「流通」の意味に使っても問題はない。しかし、『資本論』では、明確に用法が区別されているのである。資本論翻訳委員会(新日本出版社)の邦訳『資本論』もUmlaufに「通流」という訳語を当てている¹⁾。

本稿の課題は、訳語として「通流」を用いることの妥当性を検討することにある。本稿は、『資本論』のドイツ語版、英語版、フランス語版、各種邦訳、『経済学批判』を用いて、ZirkulationとUmlaufの用語問題を考証したものである。結果として、エンゲルスが英語版『資本論』において、Umlaufの訳語としてcurrencyを用いた趣旨に照らして、「通流」いう訳語は妥当である、というのが本稿の結論である。

Keyword

商品の流通、貨幣の通流、流通手段、Zirkulation, Umlauf
Circulation of Commodities, Currency of Money, Medium of Circulation, Circulation, Currency

序 言

本稿の課題は、マルクス(Karl Marx 1818-1883)の『資本論』で説かれている貨幣の機能の一つである流通手段としての貨幣の問題を、商品のZirkulationと貨幣のUmlaufの訳語問題に関して考察することにある。

流通手段論は、『資本論』第1部 資本の生産過程、第1編 商品と貨幣、第3章 貨幣ま

たは商品流通の中の第2節 流通手段、として位置づけられている。

商品のZirkulationと貨幣のUmlaufの問題に関しては、日高普『経済原論』(時潮社、1964、30頁、有斐閣、1983、34頁)の中で提起されている。Zirkulationを「流通」と訳し、Umlaufを「通流」と訳し、商品の「流通」、貨幣の「通流」と使い分けるべきだ、ということである。商品は持ち手の転換に

¹⁾ 本稿における『資本論』の邦訳は、資本論翻訳委員会(新日本出版社)のものである。

よっていずれは消費過程に入るのに対して、貨幣は持ち手を変えながらも流通の中にとどまる。この相違をマルクスは、『資本論』の中で Zirkulation と Umlauf の用語上の区別として、明確に使い分けている。貨幣と商品とでは、流通の中での「流れ」が異なるのである。

新日本出版社刊行の邦訳『資本論』（社会科学研究所監修資本論翻訳委員会訳、1982）は、Umlauf に日高『経済原論』と同様に「通流」の語を当てている。「通流」という日本語は存在するが、「流通」との区別はつけにくい。敢えて区別する意味があるかどうかという疑問も生じる。本稿の課題は、この訳語問題にある。

すなわち、Zirkulation と Umlauf の相違にどれだけの意味があったのか、またこの相違を邦訳に反映させる意味はあるのかどうか、これが本稿の課題である。文献考証によって、この問題を考察していきたい。

なお、参考資料として、本論文の末尾に、『資本論』第I部第1章から第3章までの目次の細目と第4章のタイトルを、各項目について、日本語、ドイツ語、英語、フランス語の順に紹介してある。ドイツ語は、マルクス＝エンゲルス全集第23巻、いわゆる現行版のものである。

1 英訳『資本論』の意義

Zirkulation と Umlauf の訳語問題に関しては、英訳が最も重要な役割を果たしている。英訳『資本論』（1887, Marx [1990]）には、その「序文」の中でエンゲルスが紹介しているように複数の訳者が関わっており（Marx [1990], pp.11-12, 英語版序文のドイツ語訳は [1971a], S.37）、エンゲルスも深く関わっ

た訳書である。エンゲルスの関与というよりも、英訳の編者はエンゲルス自身である。エンゲルスの語学力は定評がある。若き日にはイングランドのマンチェスターで父親のビジネスにかかわっている。言うまでもないが英語は堪能である。英訳『資本論』はエンゲルスのこだわりの訳書ともいえる。

1887年の英訳『資本論』のタイトルは以下のようなものである。

CAPITAL: A CRITICAL ANALYSIS OF
CAPITALIST PRODUCTION BY
KARL MARX

TRANSLATED FROM THE THIRD
GERMAN EDITION, BY SAMUEL
MOORE AND EDWARD AVELANG
AND EDITED BY FREDERICK
ENGELS

VOL. I.

LONDON: SWAN SONNENSCHNEIDER,
LOWREY, & C.O., PATERNOSTER
SQUARE. 1887.

『資本論』のサブタイトルは、現在の英訳本の A Critique of Political Economy（ドイツ語の Kritik der politischen Ökonomie、邦訳「経済学批判」）ではなく、A Critical Analysis of Capitalist Production となっている。「資本主義的生産の批判的分析」、である。（CAPITALIST PRODUCTION を「資本家」的生産ではなく、「資本主義的」生産と訳したのは、邦訳の慣行に従ったものである）。

また、編者は FREDERICK ENGELS となっているが、これは Friedrich Engels のことであり、エンゲルスは、序文の最後にも、‘FREDERICK ENGELS. November 5, 1886.’ と記している。

英訳『資本論』でのサブタイトルの変更は、マルクス死後のことであり、あくまでも私見だが、エンゲルスの独自の判断であると推測される。

ドイツ語版『資本論』のサブタイトルの *Kritik der politischen Ökonomie* (経済学批判) は、マルクスにとっては、特別の意味を持っている。すなわち、マルクスにとっての『資本論』の課題は、資本主義経済の分析であると同時に、スミス、リカードをはじめとする古典派経済学、あるいは先行学説に対する批判がもう一つの大きな課題であった。

古典派経済学に対する批判は、学説批判としての意味を超えている。学説の内容に対する批判もあるが、より重要なことは、商品経済と資本主義の経済システムが、搾取関係を隠ぺいする仕組みをもっており、古典派経済学はこの仕組みを暴くことなく、資本主義そのもののシステムの持つ思想に迎合しているという批判である。

マルクスは、唯物史観にもとづいて、資本主義を歴史的な特定の時代として相対化し、経済学によって、資本主義のシステムが持つ隠ぺいのメカニズムを解明しようとしている。市場は常に自由であり平等である。売り手と買い手は対等である。しかし、マルクスの経済学批判は、自由平等の市場の中で、剰余価値が形成され、搾取が行われ、それが古典派も含む人々の目に見えなくなるシステムを資本主義が持っているということである。批判の意図は、経済システムとしての資本主義的なイデオロギーに対する批判を含んでいるのである。

マルクスにとっての資本主義経済システムに対する批判は、同時に、資本主義を歴史的に相対化できなかった古典派経済学への批判

でもある。これが『資本論』のサブタイトルに用いられた「経済学批判」の趣旨である。これは、マルクスにとっては、欠かすことのできない重要な主題である。

エンゲルスは、自ら編集責任を負う1887年の英訳で、このサブタイトルを捨てている。マルクスの没年は1883年である。英訳には、エンゲルスの意思が強く反映されていたといえる。

また、progress社刊の英訳『資本論』(Marx [1996]) では、*Critique of political economy* (経済学批判) に変更されている。この変更は、1887年の英訳のサブタイトル、*A Critical Analysis of Capitalist Production* が生前のマルクスの指示ではなかったことの傍証になるのではないかと考える。

英訳『資本論』第1部(1887, Marx [1889]) は、現行版の7編25章の構成とは異なり、全体で33章の構成である。これは、フランス語版『資本論』(Marx [1989]) に従ったものである。

変更の理由は2点ある。第1に、ドイツ語の現行版の「第4章 貨幣から資本への転化」の3つの節(「第1節 資本の一般的定式」、「第2節 一般的定式の矛盾」、「第3節 労働力の売買」)がそれぞれ章として独立していることである。第2に、現行版の第7編第24章に含まれている「いわゆる本源的蓄積」が、第8編(PART VIII - THE SO-CALLED PRIMITIVE ACCUMULATION)として独立し、ドイツ語版と重複する章も含めて、全体が8章で構成されたことである。これがドイツ語版の7編25章編成と英語版およびフランス語版の8編33章編成の違いの理由である²⁾。

また、英語版は、もともとは2つに分けて出版されている。CHAPTER I. — Commodities

(第1章商品)から CHAPTER XIV. — Division of Labour and Manufacture (第16章分業とマニュファクチュア)がVOL. I (第1分冊)であり、CHAPTER XV.—Machinery and Modern Industry (第15章機械と近代的産業)からが、VOL.2 (第2分冊)である。なお、英訳第15章に対応するドイツ語第13章のタイトルはMaschinerie und grosse Industrie (機械と大工業)であり、英訳と字句通りには対応しない。

ところで、フランス語版は再版『資本論』とほぼ同時期の訳で、マルクスが翻訳に関与しており、1872-1875にかけて分冊で刊行されている。フランス語版『資本論』のタイトルの下には、TRADUCTION DE M. J. ROY, ENTIÈREMENT REVISÉE PAR L' AUTEUR、と記されている。この記述は、翻訳はRoyによるが、著者すなわちマルクスによってすべて検討されたものである、という趣旨である。フランス語版はマルクス自身の校閲した『資本論』の重要な版と言える。

また、『資本論』は、「第1版 序文」の冒頭に記されているように、『経済学批判』(Marx [1859]、以下『批判』と略記)の続きとして出版されたものであり、『資本論』の第1章から第3章までは、主題が重複している。このうち『資本論』の第1章と第2章は『批判』の第1章と対応しているが、大幅に変更されている。しかし、本稿のテーマである流通手段論を含む『資本論』の第3章は、

記述は異なっているが、内容的には大きな違いはない。したがって、『批判』は、用語問題の検討には重要な文献と言える。

II 流通手段論の位置づけ

『資本論』第I部資本の生産過程、第1編商品と貨幣、第3章貨幣または商品流通、第2節流通手段が、『資本論』の編成の中での流通手段論の位置づけである。

貨幣の流通手段機能は、経済学にとっては何の変哲もない機能である。一般には「交換手段」と呼ばれている機能である。アダム・スミス(Adam Smith, 1723-1790)が『国富論』の中で交換の道具とみなした貨幣の機能である(cf. Smith [1981], p.33, 訳48頁)。この機能が『資本論』では「貨幣または商品流通」の中心的な課題として論じられている。

『資本論』の論理は、抽象度の違いに応じて3つの層をなしている。第1に、資本の存在を前提としない商品と貨幣との織り成す流通の領域である。資本の存在を前提としない範囲での商品流通、いわゆる「単純流通」³⁾の領域である。『資本論』の第1部第3章のタイトルは、「貨幣または商品流通」(Das Geld oder die Warenzirkulation, Marx [1971a], S.109)であるが、『資本論』の前身である『批判』では、第2章「貨幣または単純流通」(Das Geld oder die einfache Zirkulation, Marx [1971b], S.49)⁴⁾である。『批判』の「単純流通」が『資本論』の「商

² Marx [1993]のフランス語版『資本論』は、ドイツ語版と同じ、25章構成である。

³ 「単純流通」の範囲内でも、貨幣の支払手段機能では、掛売りと掛買いを事例に支払手段としての貨幣機能を説く。ここには手形の転々流通まで説かれている。したがって、暗黙には資本の存在が想定されていると言える。ただ、論理の展開として資本を前提にしないという条件は守るということであろう。

⁴ 『資本論』の第2章「交換過程」の内容は、『経済学批判』においては第1章に含まれているが、章としては独立していない。したがって、『資本論』では、『批判』の第2章「貨幣または単純流通」が「貨幣または商品流通」に名称を変更されて第3章となる。

品流通」に対応している。

第2に、価値の概念を軸に資本主義の基幹となる産業資本を分析する領域である。『資本論』第I部 資本の生産過程の第5章以下と第II部 資本の流過程がこれに当たる。そして第3に、産業資本によってつくられた剰余価値が利潤、利子、地代として分配される仕組みの分析である。『資本論』第III部 資本主義的生産の総過程がここに当たる。

『資本論』の編別構成でいうと、資本の生産過程の第1編「商品と貨幣」が、単純流通の領域であり、「第2編 貨幣から資本への転化」を単純流通から生産の領域への移行の理論として、第2の資本主義的生産の研究領域に移る。

第1編が研究対象とする領域は、資本を前提とせずに、商品経済を分析する領域である。商品経済は資本がなくても発生しうる。『資本論』にも、『批判』から引用しつつ、「商品生産と商品流通は、その範囲や影響力が異なるにしても、きわめて多様な生産様式に属する現象である」(Marx [1971a], S.128, 訳194頁)、という指摘がある。

単純流通の領域を研究対象として設定する理由は、商品経済の方が、資本主義よりも歴史的にも社会的にもより普遍的にみられる経済事象であり、かつ、資本主義経済においても、資本主義的生産や分配の関係とは区別された流通部面を形成する領域であることにあつた。古典派経済学が富の形成と分配を主題とするとしても、そのシステムは商品と貨幣の作り出す市場によって行われる。

商品は、資本主義的生産の結果の産物であり、貨幣は生産と消費をつなぐ市場の媒介物である。そして、この媒介物が市場の主役である。そして、マルクスにとっては、どの

社会でも行われている生産と消費を市場において媒介するものとしての商品と貨幣の社会的な機能を解明することが、第1編「商品と貨幣」の主題となる。

第1編には主要な論題が3つある。第1に、価値と労働との関係を解明すること、第2に、商品と貨幣の概念を生成論によって解明すること、そして第3に、商品経済の社会的な役割を解明することである。

本稿が課題とする流通手段論は、この中の第3の課題の中心をなす。

もちろん、エンゲルスとマルクスとが『資本論』に関して同じ理解を持っている訳ではないことは、これまでもさまざまな点で指摘されてきたことである。しかし、結論からすると、本稿の問題に関しては、両者に違いはない。

III 商品の流通と貨幣の通流—訳語問題の意義

単純流通は、市場の分析ではあるが、需要と供給の分析ではなく、等価交換、すなわち価値どおりの交換が前提とされている。商品と貨幣との概念の把握が主たる目的となる。

マルクスは、「第1章 商品」において、商品の2要因と商品と貨幣の合理性を論理的に解き明かす。その上で、「第2章 交換過程」において、交換における価値の実現と使用価値の実証の問題を指摘し、形態としての商品と貨幣がこの問題に関する解決の形式をもたらすことを論じる。

第1章に含まれる価値論や価値形態論は、マルクス経済学研究の中心テーマであるが、「単純流通論」として見れば、単純流通の世界を解明するための理論的な準備段階に当たる。また、第2章第1節「価値尺度」は、マルクスの場合、貨幣が商品の価値表現の素材

となる機能である。商品の目に見えない存在である価値が、金という貨幣素材で表現されることによって、価格という目に見える社会的な形をとる。商品は、価格をつけてから流通の領域に入るので、『批判』によれば、「価値尺度」は単純流通を分析するための「理論的な準備過程」(Marx [1971b], S.49, 訳77頁)となる。

また、第3節「貨幣」は、3つの節すべてで貨幣の機能を扱っているので、第3節について「貨幣」というタイトルを付すのは奇妙である。しかし、マルクスは、流通に対して自立性を持った貨幣を「貨幣としての貨幣」と呼ぶ。マルクスの生前の刊行であるフランス語訳では、この「貨幣としての貨幣」(La monnaie ou l'argent)がタイトルとして使用されている。

この第3節の「貨幣」の最初のテーマは、新日本出版刊行の邦訳では、「a 蓄蔵貨幣の形成」となっているが、原典のドイツ語は *Schatzbildung*、財宝の蓄積であり、邦訳とはやや語感が違う。英語訳は *Hoarding*、貯蔵や貯金、フランス語で *Thésaurisation*、蓄財である。ドイツ語、英語、フランス語の用法からすると、宇野弘蔵がいわゆる新『原論』において、蓄蔵貨幣に一般性を持たせて「貯蓄」と呼んだことは(宇野 [1964]、45頁)、マルクスの趣旨から離れたものではない。

また、「貨幣」の最後の「世界貨幣」は、国際間で使用される貨幣機能であり、貨幣の新たな機能ではなく、また国内の単純流通に対しては国家間で使用されるという意味で外の流通領域である。

とはいえ、国と国との間で使われる貨幣とはいっても、現在の国際通貨とは異なる。訳

語は、ドイツ語では *Weltgeld* であり、文字通り日本語訳の「世界貨幣」である。しかし、英語訳は *Universal Money* である。universe は地球を超えて宇宙まで含む語なので、金貨幣のもつ普遍性の語感は強くなる。この英訳は、フランス語訳 *La monnaie universelle* を基にしたものである。

世界貨幣とはいっても、金本位制の時代の金貨幣は、国際的に使われる貨幣ではあっても、国内的にも用いられていたもので、今日われわれが使っている「国際通貨」とは異なる。より普遍性をもった貨幣である。国内貨幣が鑄貨の刻印を捨てて、地金としての意味を持てば、それが、*Weltgelt*、すなわち世界貨幣となる。

ところで、本稿の課題ではないが、流通界から相対的に自立した「貨幣としての貨幣」は、資本として流通に投げ入れられることによって、資本へと変身する。したがって、貨幣としての貨幣は、『資本論』にとっては、貨幣から資本への転化の移行論の前段をなす論理と言える。したがって、単純流通論の中核部分は、第2節「流通手段」になる。

第3章第2節「流通手段(*Zirkulationsmittel*)」は、「a 商品の変態」(*Die Metamorphose der Waren*)、「b 貨幣の通流」(*Der Umlauf des Geldes*)、「c 鑄貨。価値章標」(*Die Münze. Das Wertzeichen*)、からなる。

マルクスは「流通」を言い表す *Zirkulation* と *Umlauf* を用語上区別しているのである。用語上の区別は、概念上の区別を反映したものである。すなわち、商品に関しては *Zirkulation*、貨幣に関しては *Umlauf* を用いているのである。商品流通は *Warenzirkulation*、貨幣流通は *Umlauf des Geldes*、あるいは *Geltumlauf* である。『批判』は *Geltumlauf* が一般的に

使用されているが、『資本論』では基本的に Umlauf des Geldes が用いられ、Geltumlauf も併用されることとなっている。

また、『批判』では、流通手段を意味するドイツ語として Zirkulationsmittel と並んで Umlaufsmittel が用いられている。しかし、『資本論』では、Umlaufsmittel は用いられていない。流通手段を意味する語は、『資本論』では Zirkulationsmittel だけになっている。

なお、『批判』の前提となっているマルクスの『1857—58年の経済学草稿』では、「貨幣の流通(Circulation)または通流(Umlauf) (Marx [1976], S.117, 邦訳185頁)、と表現されており、この時点では Zirkulation と Umlauf は同じ意味で用いられていたと思われる。

Zirkulation と Umlauf を「流通」と「通流」と訳し分け、商品に関しては「流通」、貨幣に関しては「通流」と訳すべきだとする主張は、日高普『経済原論』(時潮社、1964、30頁、有斐閣1983、34頁)、が提唱していたことである。貨幣の「通流」という訳語は、社会科学研究所監修、資本論翻訳委員会訳『資本論』(新日本出版社、1982)の訳に取り入れられている。商品の「流通」(Zirkulation)と貨幣の「通流」(Umlauf)とが訳し分けられているのである。

「流通」と「通流」とはどこが違うのか。国語辞典レベルでは判別できない。Zirkulation も Umlauf も、ドイツ語としては、どちらも商品や貨幣の「流通」と訳して問題はない語である。

しかし、『資本論』は Warenzirkulation と Geltumlauf あるいは Umlauf des Geldes とを用語上明確に区別している。かつ、次の

ような表現がある。

Die dem Geld durch die Warenzirkulation unmittelbar erteilte Bewegungsform ist daher seine beständige Entfernung vom Ausgangspunkt, sein Lauf aus der Hand eines Warenbesitzers in die eines andren, oder sein Umlauf (currency, cours de la monnaie).

「商品流通によって貨幣に直接与えられる運動形態は、貨幣が絶えずその出発点から遠ざかること、ある商品所有者の手から別の商品所有者の手に移っていくこと、すなわち貨幣の通流である。」

(Marx [1971a], S.129, 邦訳195頁)

本稿にとって重要なのは、引用中の sein Umlauf すなわち日本語訳の「貨幣の通流」である。このドイツ語の Umlauf には英語とフランス語で (currency, cours de la monnaie) との置き換えがある。新日本出版社刊行の邦訳は、このカッコ内の部分を訳していない。

岡崎次郎訳『資本論』(大月書店)は、Umlauf を「流通」と訳している。その上で『資本論』の本文中の括弧書きの部分も「(currency, cours de la monnaie)」と英語とフランス語の用語をドイツ語の原典通りにそのまま挿入している。(岡崎訳 [1968]、159頁)

向坂逸郎訳(岩波書店)は、Umlauf を「流通」と訳し、タイトルに「ウムラウフ」と添え字を付けている(向坂訳 [1967]、149頁)。また、カッコ内は原書通り訳している。

フランス語版は、貨幣の流通を le cours de la monnaie (currency) (Marx [1989], p.90)、と訳している。

ドイツ語版も英語版も対応する英語として currency を当てている。

逆に英語版は This course constitutes its currency (cours de la monnaie) として、currency に対応する語としてフランス語の cours de la monnaie を指示している (Marx [1996], p.77)。

Umlauf の訳に関して、英語版は重要な注を付している。

Translator's note. — This word is here used in its original signification of the course or track pursued by money as it changes from hand to hand, a course which essentially differs from circulation (Marx [1990], p.99)。

英語版は、エンゲルスも共同責任を負った版である。引用した部分は、ドイツ語の Umlauf は英語の course や track の意味を含んでいるという趣旨である。この含意を生かすために、currency が Umlauf に対応する語として使用されたということである。また、英語版で *Translator's note* がつけられているのは、Umlauf に関する説明の箇所だけである。なお、新日本出版刊行の邦訳は、英語版の *Translator's note* の日本語訳を収録している。

フランス語の cours は水などの「流れ」である。血液の「循環」や天体の「運行」の意味もある。cours de la monnaie は、そのままドイツ語に対応している。ドイツ語版の der Umlauf des Geldes は、フランス語版では Cours de la monnaie (Marx [1989], p.90) である。

しかし、英語版の the currency of money は、der Umlauf des Geldes に対応するのだ

ろうか。英語の currency は、通常はそのまま「通貨」を指す用語であり、「普及」の意味もあるが、ドイツ語の Umlauf やフランス語の cours には対応しない。英語で対応する用語は、course である。course であれば、「進路」や「経路」の意味も、血液の「流れ」の意味もある。しかし、『資本論』では、ドイツ語の Umlauf に対応する英語としては currency を指示している。currency には、「流通」の意味があったとしても、「通貨」としての基本的な意味がある。

英語版には、この問題に関して重要な指示がある。

エンゲルスは、Umlauf に対応する英語として course と track を上げながら、Umlauf des Geldes を currency of money と英訳したのである。先の英訳に固有の *Translator's note* は、エンゲルスの責任でもある。とはいえ、これはエンゲルスの独自の判断ではない。先にも示したように、フランス語版は、le cours de la monnaie (currency) と表記する。ドイツ語の Umlauf をフランス語で le cours と訳し、対応する英語としてカッコ書きで英語の currency を挿入している (Marx, op.cit., p.90)。フランス語版は、マルクス生前のものであり、その翻訳はマルクスによって完全にチェックされていることを明記された翻訳書である。エンゲルスは Umlauf の訳語として、英語版『資本論』では、マルクスの意図を汲んで currency と訳したのである⁵⁾。

とはいえ、currency という訳語が一般になじめないと考えて、*Translator's note* を

⁵⁾ 別のフランス語版では、parcours (currency, cours de la monnaie (Marx [1993], p.130) と表記しているものもある。「経路」の意味をより強く打ち出したものであろう。

付記したものと思われる。邦訳の「通流」がなじめないのと同じ問題を英語版『資本論』も抱えたのである。

エンゲルスの意図を解くカギは、エンゲルスによる「序文」Preface to the English Edition (Engels, 1886)の中にある。

There is, however, one difficulty we could not spare the reader: the use of certain terms in a sense different from what they have, not only in common life, but in ordinary Political Economy. But this was unavoidable. Every new aspect of a science involves a revolution in the technical terms of that science (Marx [1990], p.12, 英語版序文のドイツ語訳は [1971a], S.37, 参照).

要するに『資本論』の英語訳では、日常的にも通常の経済学でも使わない用語を使わざるを得なかった、ということである。そしてエンゲルスは、その理由を引用の中で「科学の新しい局面には、その科学における専門用語の革命が伴うのである」、と説明している。

Umlaufの訳語としてのcurrencyは、日常的には「通貨」であるが、『資本論』においては、商品の流通を意味するcirculationとは違った意味をもつ貨幣の「流通」、日高原論でいう「通流」という概念として使用するということである。

エンゲルスは、Umlaufの訳語としてのcurrencyが一般的には受け入れにくいと判断して、序文の中で、科学の発展の一環として日常的な使用法とは違った新しい用法を用いていることを釈明し、本文中においてカッコ書きの解説を加え、さらにtranslator's noteによって説明をしたものと考えられる。translator's notがつけられているのは、Umlaufの説明の箇所だけであり、「科学の

新しい局面」に対応するために使用された用語がcurrencyであった可能性は高い。

結 語

これまでの検討によって、貨幣と商品の流通の違いを示すZirkulationとUmlaufの区別は、マルクスにとっても妥協のできないのであった、と言える。エンゲルスは、英訳本において、この用法に関するマルクスの意図を正確に受け継いだものと推測される。

この問題は、わが国では日高普の問題提起を承けて、商品の「流通」と貨幣の「通流」の問題となって提起された。新日本出版訳では、貨幣の「通流」の訳語を採用している。「通流」の訳語は、一般にはなじみの薄いものである。しかし、英語版でのエンゲルスのcurrency問題を考えると、用語として訳し分け、読者に定着させるのが、マルクスの意図を汲むことになると言える。本稿における考証の結論として、日高『経済原論』の用語問題の提起は、正当なものであったと言える。

本稿の課題は、流通手段論における用語問題の検討に限定されている。流通手段論そのものの抱える問題に関する検討は、別の機会に譲る。

参考資料 『資本論』の第1章から第3章までの各項目について、目次のタイトルを、日本語、ドイツ語、英語、フランス語の順で示したものである。

第I部 資本の生産過程

Erstes Buch Der Produktionsprozeß des Kapitals

Volume I Book One: The Process of Production of Capital

LIVRE PREMIER DEVELOPPEMENT

DE LA PRODUCTION CAPITALISTE

第1編 商品と貨幣

Erster Abschnitt Ware und Geld

Part 1 : Commodities and Money

PREMIÈRE SECTION MARCHANDISE
ET MONNAIE

第1章 商品

Ersteskapitel Die Ware

Chapter 1 : Commodities

Chapitre I LA MARCHANDISE

第1節 商品の2要因—使用価値と価値
(価値の実体、価値の大きさ)

1. Die zwei Faktoren der Ware : Gebrauchswert und Wert (Werts substanz, Wertgröße)

Section 1 : The Two Factors of a Commodity : Use-Value and Value (The Substance of Value and the Magnitude of Value) .

I Les deux facteurs de la marchandise : Valeur d'usage et valeur d'échange ou valeur proprement dite (Substance de la valeur. Grandeur de la valeur)

第2節 商品に表される労働の二重性

2. Doppelcharakter der in den Waren dargestellten Arbeit

Section 2 : The Two-fold Character of the Labour Embodied in Commodities

II Double caractère du travail présenté par la marchandise

第3節 価値形態または交換価値

3. Die Wertform oder der Tauschwert

Section 3 : The Form of Value or Exchange-Value

III Forme de la Valeur

第4節 商品の物神的性格とその秘密

4. Der Fetischcharakter der Ware und sein Geheimnis

Section 4 : The Fetishism of Commodities and the Secret Thereof

IV Le caractère fétiche de la marchandise et son secret

第2章 交換過程

Zweiteskapitel Der Austauschprozeß

Chapter 2 : Exchange

Chapitre II DES ÉCHANGES

第3章 貨幣または商品流通

Dritteskapitel Das Geld oder die Warenzirkulation

Chapter 3 : Money, Or the Circulation of Commodities

Chapitre II LA MONNAIE OU LA CIRCULATION DES MARCHANDISES

第1節 価値の尺度

1. Maß der Werte

Section 1 : The Measure of Values

1) Mesure des valeur

第2節 流通手段

2. Zirkulationsmittel

Section 2 : The Medium of Circulation

2) Moyen de circulation.

a 商品の変態

商品の「流通」(Zirkulation)と貨幣の「通流」(Umlauf)

- a) Die Metamorphose der Waren
- A. The Metamorphosis of Commodities
- a) La métamorphose des marchandises.

- b 貨幣の通流
- b) Der Umlauf des Geldes
- B. The currency of money
- b) Cours de la monnaie.

- c 鑄貨。価値章標
- c) Die Münze. Das Wertzeichen
- C. Coin and symbols of value
- c) Le numéraire ou les espèces - Le signe de valeur

第3節 貨幣

3. Geld

Section 3: Money

3. La monnaie ou l'argent

a 蓄藏貨幣の形成

a) Schatzbildung

A. Hoarding

a) Thésaurisation

b 支払手段

b) Zahlungsmittel

B. Means of payment

b) Moyen de payement.

c 世界貨幣

c) Weltgeld

C. Universal Money

c) La monnaie universelle.

第2編 貨幣から資本への転化 第4章

貨幣から資本への転化

Zweiter Abschnitt Die Verwandlung von Geld in Kapital

Vierteskapitel Verwandlung von Geld in Kapital

Part 2: Transformation of Money into Capital

Chapter 4: The General Formula for Capital

DEUXIÈME SECTION - LA TRANSFORMATION DE L'ARGENT EN CAPITAL

参考文献

Smith, Adam [1981], *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, original edition, 1776, ed., by R.H.Campbell and A. S.Skinner, Liberty Fund, Dianapolis (『国富論』水田洋監訳、岩波文庫、全4分冊、2001)

Marx, Karl

[1887], *Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production*, Swan Sonnenschein, Lowrey, & C. O. London, reprint, edited and translated by Dona Torr, George Allen & Unwin LTD, 1938.

[1889] *Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production*, Appleton & CO, New York, Swan Sonnenschein & CO, London

[1959], *Das Kapital, Band I, Kritik der politischen Ökonomie*, first edition, Verlag von Otto Meissner Hamburg, 1867, rpt. Aoki Shoten Publishing.

[1969], *Das Kapital. Band I Kritik der politischen Ökonomie* second edition Verlag von Otto Meissner Hamburg, 1872, rpt. Far Eastern Book-Sellers · Publishers.

[1971a], *Das Kapital, Marx-Engels Werke*, Dietz Verlag, Berlin, Bd. 23.

『資本論』第I部第1分冊、社会科学研究所監修、

- 資本論翻訳委員会訳、新日本出版社、全13分冊、1982。
- 『資本論』第I部第1分冊、マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳（岡崎次郎訳）、全5分冊、大月書店、1968年。
- 『資本論』第一巻、向坂逸郎訳、全4分冊、岩波書店、1967年。
- [1971b], *Zur Kritik der Politischen Oeconomie, Marx-Engels Werke*, Bd.13. 『経済学批判』、杉本俊朗訳、大月書店、国民文庫、1966。
- [1976], *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, MEGA 2.Abteilung, Band 1, Dietz Verlag, Berlin, 1976, 『1857-58年の経済学草稿』、資本論草稿翻訳委員会訳第1分冊、大月書店。
- [1987], *A Contribution to the Critique of Political Economy, Karl Marx-Frederick Engels Collected Works*, Progress Publishers, Moscow, Vol. 28.
- [1989], *Le capital*, Paris 1872-1875, Dietz Verlag, Berlin. [Le Capital, Traduction de M. J. Roy, Éditeurs, Maurice Lauchatre et CIE, 1872-1875]。
- [1990] *Capital: A Critical Analysis of Capitalist Production 1887*, Dietz Verlag, Berlin.
- [1993], *Le capital*, Qadridge PUF, Paris, Avant-propos, introduction et notes par Jean-Pierre Lefebvre.
- [1996], *Capital: Critique of political oeonomy, Marx-Engels Works*, Progress Publishers, Moscow, Vol. 35.
- 宇野弘蔵 [1970] 『経済原論』、初出、上巻、1950、下巻1952、岩波書店、合本改定版、1970。
- 宇野弘蔵 [1977]、『経済原論』、岩波全書、1964、改訂版、1977、岩波文庫2016)
- 日高普 [1964]、『経済原論』、時潮社。
- [1983]、『経済原論』、有斐閣。